2018年2月
聖句随想・折々の言（ことば）

「 素通りできない　悪人のクリスマス 」

牧師　森　言一郎

ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。
（マタイによる福音書 2章19～21節）

主イエス・キリスト降誕の時代に、「ユダヤ人の王」として君臨していたのが「ヘロデ大王」と呼ばれる人でした。紀元前 37 年から紀元後 4 年まで在位した歴史上の人物です。

ヘロデ大王は純粋なユダヤ人ではありませんでした。血を重んじるユダヤの社会では、それだけでも信頼されない理由になります。

彼は「すべての道はローマに通ず」と言わしめたローマ皇帝との関係を巧みに作り上げていきます。

＊

ヘロデ大王について調べてみると、「こいつは相当な〈悪人〉であり〈悲哀〉を感じる男だ」という印象が濃くなります。

10 人の妻がおり、王子も少なくとも 15 人はいたようです。しかし彼は、誰も信じることができなくなり、三人の王子を殺害。最愛の妻までも殺してしまうのです。

＊

こんなヘロデ大王が腰を抜かすほど驚く事件。それが東方の占星術の博士たちのエ

ルサレム来訪でした。

彼らが伝えた【ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。】という言葉はヘロデ大王にとって認めがたい挨拶でした。

彼は焦りました。そして、努めて冷静さを装いながら命じたのです。

【行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう】と。

ヘロデ大王は占星術の博士たちが戻って来るのを待ち続けましたが、やがて彼は気付きます。王である自分が出し抜かれたということを。占星術の博士たちにはお告げを受け、【別の道】を通って自分たちの国へ帰って行ってしまったからです。

＊

激怒したヘロデ大王の行動は残ぎゃく極まりないものとなります。

マタイによる福音書 2 章に記録されるエルサレム近郊に暮らす 2 歳までの男児虐殺の出来事は、読み飛ばしたくなるようなおどろおどろしいものですし、大して重要ではないように感じるのです。私自身、長年そう思っていましたが、うかつでした。

*

実は、4 つある福音書の中で、マタイ福音書だけが男児虐殺の記録を残しています。唯一マタイだけが記録したということは、福音書を記したマタイが、何としても読者に伝えたいメッセージをこの部分に抱えていたということです。

考えるためのヒントはいつも聖書の中に隠されています。福音書の中でいちばん旧約聖書の引用が多いのがマタイ福音書です。冒頭のあの延々と続くイエス・キリストの系図も、旧約の歴史がまと

められているものです。

マタイには一つの祈りがありました。それは、同胞であるユダヤ人が納得する形で福音を伝えたいという願いです。そのために、避けて通れない出来事が男児虐殺にまつわる記録だったのです。

＊

特に注目したいのは、マタイがこの出来事の中で引用している旧約聖書のみ言葉です。男児虐殺の記録にかかわるみ言葉として、彼は預言者エレミヤの言葉を引用します。エレミヤ書 31 章 15 節には元々こうあるのです。

【主はこう言われる。ラマで声が聞こえる 苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む 息子たちはもういないのだから。】

エレミヤの預言。この箇所だけを見ると、悲しみに満ちた情景しか思い浮かびません。ヘロデ大王

による残虐行為までもが、神のみ心のだったのか、とすら感じてしまいます。

＊

しかし、マタイによる福音書を初めて聴いた人々、つまり、旧約聖書に精通したユダヤの人々は、先程の引用箇所のあとに続くみ言葉に、深い慰めと希望があることを知っている人たちでした。それが以下のみ言葉です。

【主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰って来る。】（エレミヤ書 31 章 16 節～ 17 節）

＊

旧約聖書への馴染み方が今ひとつの私たちは、このみ言葉があることを知らないので

す。読んだことがあったとしても、エレミヤ書 31 章には他にもっとよく知られている「新しい契約」の話が出て来ますから、印象に残りにくいのです。

＊

私はこう想像します。旧約聖書に精通した同胞たちに福音を伝えようとしたマタイは、エレミヤが預言した希望の福音の部分を敢えて記さなかったのだと。マタイの胸に秘められた思いはこうです。

「あなた方は知っているはずだ。エレミヤがその先に記した言葉が何であるのかを。涙がことごとくぬぐわれる日は必ず来る。未来には希望が、あなた方が信じて読んで来た聖書には、新しい約束が示されているではないか。私がこれから記そうとしている福音。それは、いにしえの預言者たちの言葉の成就に他ならない」

この世の権力をほしいままにしたヘロデ大王は西暦 4 年に死んで行きます。彼の元に永遠はありませんでした。

*

幼子イエスは無事ユダヤの地に戻って来ます。我々は「めでたしめでたし、一件落着」と納得してしまいそうになります。

しかし、マタイはむしろ、ずーっと先の方に福音書の読者の心を向けさせたかったのです。

確かに、幼子イエスはヘロデ大王には殺されないで済みました。けれども、時が満ちるときに、イエスは十字架に向けての道を歩み始めなければなりません。マタイによる福音書は 26 章以下の受難の記事があってこその福音書であり、その先 28 章のイエス･キリストの復活の出来事をもって完成するのです。

イエスは、ヘロデ大王によっては殺されませんで

したが、〈ヘロデ以上の悪人たち〉の手によって無残な死を遂げます。鞭打たれ、肉は裂け、血を流し、すべてのものから十字架の上に見捨てられる。そこには十二人の弟子たちもおりました。我々はその事実を他人事にはできません。

*

思い起こしましょう。占星術の博士たちが捧げたものが何であったのかを。

【彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。】とあります。

中でも【没薬】。それは死者の葬りに用いるための宝です。秘められたメッセージがここにもあります。

クリスマス物語に続くマタイ福音書の 3 章は洗礼者ヨハネの【悔い改めよ。天の国は近づいた】という叫びと共に本格的に扉が開きます。

＊

悪人であり、罪人の頭のひとりであることを認めざるをえない私たちは、その声を聴いているでしょうか。私たちは、素通りできない降誕節の歩みを、既に今年も始めているのです。end